

氏名	たがきまさくに 田垣正晋
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第47号
学位授与の日付	平成17年5月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目	中途肢体障害者における「障害の意味」の生涯発達的变化 —— 脊髄損傷者が語るライフストーリーから ——

論文調査委員 (主査) 教授 山田洋子 助教授 遠藤利彦 教授 田中耕治

### 論文内容の要旨

本研究では、中途障害者が人生という長い時間軸において、障害からどのような意味を見いだしてきたか、脊髄損傷者、すなわち交通事故やスポーツ事故によって下肢や上肢の機能を失った人々が語るライフストーリーをもとに考察した。

#### 第1章 身体障害者を理解する方法としてのライフストーリー研究の意義

生涯発達では、人々の心身の機能の変化を人生全体からみることによって、人間の可塑性の大きさに注目する。中途障害者の心理社会的問題を考える上で重要なのは、「生涯発達における喪失の意義」(やまだ, 1995)という観点である。喪失が短期的にはマイナスであっても、生涯という長い時間をへてみたときにプラスに変わることや経験の意味づけ方を重視するのである。

上記の観点をみるには、たとえネガティブな出来事であっても、障害者本人が障害をどう意味づけているのか、当事者の経験の意味づけを取り上げる必要がある。そこで、本人が語るライフストーリーを調べることが適切である。

障害者のライフストーリー研究を、二つの軸から四つの分類を行った。一つの軸は、個人のストーリーの構成能力を重視するか、ストーリーを語らせる社会文化的文脈を重視するかである。二つ目の軸は、医療を中心にした対人援助に貢献するのか(援助貢献型)、障害をもちながら生きることの経験を明らかにすることを重視するのか(脱援助型)である。①社会文化的文脈重視・援助貢献型、②社会文化的文脈重視・脱援助型、③個人重視・援助貢献型、④個人重視・脱援助型の研究、筆者の研究は4つの型のうち個人重視・脱援助型に属する。

本研究では、生涯発達における喪失の意義という観点から、ライフストーリー研究を行う。具体的な目的は、第1には脊髄損傷者の自分の障害に対する意味づけがどのように変化してきたのかを明らかにする。第2には意義に該当する生活の肯定的側面と、障害に伴う不利益はそれぞれどのように意味づけられているのかを検討する。

#### 第2章 脊髄損傷者が語る障害の意味の長期的変化

脊髄損傷者が自分の障害をどのように意味づけているかを生涯発達という長期的な時間軸から検討した。先行研究の多くは、臨床目的からなされてきたが、本研究は、個人重視・脱援助型の立場から、大多数を占める慢性期の障害者の日常に迫ること自体を目的にした。

受障期間が10年以上で男性の外傷性脊髄損傷者を10名対象にし、受障から現在までの生活に関して半構造化面接を行った。現在の年齢は28歳から52歳(平均42.8歳)、受障年齢は16歳から29歳(平均20.2歳)、受障期間は12年から30年(平均22.6年)。身体障害者手帳の障害等級は、全員が最重度の1級だった。筆者が、受障、入院時、退院後から現在という時系列にそって、受障から現在までの生活の流れを語ってもらった。各ライフストーリーを、受障から現在までの「通時的变化」と「現状」という観点から再構成した。前者は、生活のパターンとそれへの意味づけである「テーマ」にまとめた。後者については、話し手の「肯定的意味づけ」と、肢体障害に伴う能力障害や社会的不利をどう見なしているかという「障害に伴う不利益への意味づけ」を検討した。

その結果、多くの話し手が、障害による問題を繰り返し解決してきたと見なしていた。現状への肯定的意味づけをみると、①受障前よりも仕事が改善したり、あるいは障害者への理解が深まったりした、②受障後の一時期より家庭生活が安定、③他者よりも経済的に安定、以上のいずれかが認められた。このような3通りの意味づけのすべてに、「現状はよくなった」という共通性を考察できた。

### 第3章 「元健常者」としてのライフストーリー

話し手の肯定的意味づけ、特に「障害者になって初めて知った価値」、「健常者のころの価値」、「障害に伴う不利益」をどのように意味づけているのかを、第2章の対象者のうち、もっとも受障期間が長い話し手(2名)を選択して検討した。2人は、かつて健常者であったので、「健常者」と「障害者」という二通りの人生を経験し、自らが、「元健常者」であるからこそ、社会参加や障害者援助等を通じて、障害から価値を見いだせると意味づけていた。

### 第4章 障害の意味の長期的変化と短期的変化の比較研究

受障期間の長い者と短い者とは、障害の意味づけにどのような違いがあるのかを問題にした。対象は、受障期間が15年以上になる者(以下、長期)10名と、7年以内の者(短期)14名である。長期における現在の年齢は32歳から52歳(平均40.6歳)、受障年齢は16歳から29歳(平均22.2歳)、受障期間は16年から23年(平均18.4年)、短期では、現在の年齢は20歳から31歳(平均26.5歳)、受障年齢は17歳から27歳(平均21.8歳)、受障期間は1年から7年(平均4.6年)であった。

結果としては、第1に、受障期間が長くなるにつれて、肯定的意味づけの内容および比較対象が増えた。さまざまな生活文脈を生きることで、意味づけも複雑になると考えられる。第2に、受障期間が長いの方が、受障しない場合の自己を基準にして、現状の肯定的側面を語った。第3に、障害に伴う不利益の特徴としては、短期の話し手と比べて、長期の話し手においては仕事や対人関係の問題等、社会的不利が中心となっていた。短期の話し手は、行動範囲の問題等能力障害にかかわる語りをした。第4に、長期の話し手には、受障後の生活のプロセスの評価を一旦見直して修正する意味づけがあった。第5に、受障期間が数年以上の人では、障害者と健常者との間に区分がないとする意味づけがあった。

### 第5章 まとめとライフストーリー研究の今後の課題

本研究全体の総合考察と今後の課題をまとめた。世界保健機関の新国際障害分類や、我が国の支援費制度のように、障害の分類の規格化が進んでいるが、これらは、人間としての全体像や個別性の軽視になりかねない。人間の全体性や個別性、障害者自身による経験の意味づけを重視するライフストーリー研究は、このような問題の解決のために、今後、一層必要になると考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、中途障害者が人生という長い時間軸において、障害からどのような意味を見いだしてきたのかを、彼らが語るライフストーリーのプロトコルを緻密に分析することから、おもに次の2つの観点から検討したものである。第1には、途中で障害にあった脊髄損傷者を対象にして、当事者にとって自分の障害に対する意味づけが人生を通してどのように変化してきたのかを知ることであり、第2には、生涯発達における喪失の意義という観点から、障害に伴う不利益とともに、障害にあうことよって逆に得ることができた肯定的側面があるのか、あるとすれば当事者にとってどのように意味づけられているのかを検討することである。

本研究から、おもに次のことが見いだされた。1) 脊髄損傷者が語る障害の意味の長期的変化においては、受障期間が10年以上で男性の外傷性脊髄損傷者10名を対象にし、受障から現在までの生活に関して半構造化面接を行い、彼らのライフストーリーを分析した。多くの障害者が、障害による問題を繰り返し解決してきたと語った。現状への肯定的意味づけをみると、①受障前よりも仕事が改善したり、あるいは障害者への理解が深まったりした、②受障後の一時期より家庭生活が安定、③他者よりも経済的に安定、以上のいずれかが認められた。このような3通りの意味づけのすべてに、「現状はよくなった」という共通性があった。2) 先の対象者のうち、もっとも受障期間が長かった語り手(2名)を選択して、「健常者」と「障害者」という2通りの人生を経験したことに焦点を当ててさらに詳しく語りを聞いて分析した。彼らは自らが、「元健常者」であるからこそ、社会参加や障害者援助等を通じて、障害から価値を見いだせると意味づけていた。また、不当に低く評価されたり奇異な視線をうけたりする等の障害に伴う不利益を、健常者と障害者の両方の立場からみられると語った。

「元健常者」だったからこそ、差別をする気持ちもわかるし、また今は障害者であるからこそ、差別をうける不当さがわかると語ったのである。さらに、彼らの語りでは、受障前の仕事や趣味を受障によって失ったことと、現状での障害に伴う不利益とを分離してとらえていた。

3)「障害の意味の長期的変化と短期的変化の比較」をするために、受障期間の長い者(15年以上)と短い者(7年以内)において、障害の意味づけにどのような違いがあるのかを問題にした。その結果、第1に、受障期間が長くなるにつれて、肯定的意味づけの内容および比較対象が増えた。さまざまな生活文脈を生きていくにつれて、意味づけも複雑になると考えられる。第2に、受障期間が長い者の方が、受障しない場合の自己を基準にして、現状の肯定的側面を語る傾向があった。肯定的意味づけは、受障前の自己だけではなく、受障しない場合の自己を基準として意味づけられやすいと考えられた。第3に、障害に伴う不利益の特徴としては、短期の話し手と比べて、長期の話し手においては仕事や対人関係の問題等、社会的不利が中心となっていた。短期の話し手は、行動範囲の問題等、能力や障害にかかわる語りをする傾向があった。第4に、長期の話し手には、受障後の生活のプロセスの評価を一旦見直して修正する意味づけがあった。第5に、受障期間が数年以上の人に見いだされる特徴として、障害者と健常者との間に区分はないのだという意味づけがあった。以上から、受障期間が長くなるにつれて、話し手は新たな不利益に遭遇しながらも、新しい肯定的意味づけを見いだしたり、一つの肯定的意味づけを多面的にしたりしているといえる。

本研究は、特に次の点においてオリジナルな知見を見いだした研究として、学界への貢献が期待でき、高く評価できる。

1)従来の障害者の研究は、「障害」をネガティブな体験であり、障害者は支援が必要な弱者であるという枠組みで一面的にとらえ、「障害の受容」「リハビリテーション(社会復帰)」「社会的援助」という用語で、医療モデルや福祉モデルによって検討されてきた。障害者になることが、その当事者の人生においてどのような意味をもつか、当事者個人の経験の実態に迫る研究はほとんどなかったといえよう。本研究が、個人重視・脱援助型の立場から、大多数を占める慢性期の障害者の日常に迫ること自体を目的にしたことは、新しい視点である。

2)生涯発達心理学の立場から、人生という長い時間軸で障害をとらえた場合には、「障害に伴う不利益」だけではなく、「障害者になって初めて知った価値」という肯定的意味づけもあることが見いだされた。「生涯発達における喪失の意義」という理論的観点を、中途障害者の研究から具体的に明らかにしたことが評価できる。特に、「健常者」と「障害者」という二通りの人生を経験できて豊かになったという「元健常者」の語りや、長期化するにつれて主体的に多面的な価値を見いだしていく障害者の姿が明らかになったことは興味深い知見である。

3)方法論的にも、現在新しく注目をあびるようになった、ライフストーリー法、語り(ナラティブ)を用いた質的心理学の方法を用いている。方法論的に新しいので、分析方法にも未知の部分が大きい、多大な時間と労力をかけて、幾多の新しい工夫がなされている。

但し、本研究にも問題がないわけではない。従来の障害者研究や生涯発達心理学研究のレビューがやや不十分でより広い観点からの本研究の位置づけや展望が十分にはなされていないこと、生涯発達における喪失の意義という理論的観点についての掘り下げが十分ではないこと、この研究がもたらす社会的意義や福祉実践や障害者教育と関わる議論があったほうがよかったこと等が指摘される。しかし、それは今後の課題であり、本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成17年4月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。